

令和8年新春講演会並びに賀詞交歓会

総務委員会

令和8年1月23日（金）、ホテル仙台ガーデンパレスにて一般社団法人東北地質調査業協会、一般社団法人斜面防災対策技術協会東北支部、一般社団法人全国さく井協会東北支部の3協会合同による恒例の新春講演会及び賀詞交歓会が開催されました。

新春講演会では、東北地質調査業協会の奥山清春理事長の挨拶の後、一般財団法人3.11伝承ロード推進機構の業務執行理事 原田吉信様をお迎えし「東日本大震災の対応について」と題して、ご講演を頂きました。



講演される原田吉信氏

原田様は1981年に建設省東北地方建設局（現・国土交通省）に入省され、郡山国道事務所長、東北地方整備局 企画部 技術開発調整官などの要職を歴任されました。その後、2019年に東北地方整備局 地方事業評価管理官を最後にご退職され、現在に至っております。

東日本大震災においては、被災自治体の民政支援を担当され、また事務所長在任時には、内地で初となる県道の直轄代行事業や、市町村道の大規模修繕事業にも携われ、更に、震災伝承施設の登録制度の導入にも深く関わってこられてお

ります。

本年は東日本大震災から15年という節目の年を迎え、一昨年には能登半島地震も発生し、防災意識が高まる中、「東日本大震災の対応について」と題して、当時の原田様の対応や体験を振り返るとともに、現在に至るまでの取り組みについて、ご講演頂きました。

始めに東北地方整備局の所有する大型ヘリコプター「みちのく号」からの被災映像が流れ、当時の仙台駅周辺の大渋滞状況、河川を遡上する津波、校舎の上1階を残して浸水する荒浜小学校などの状況が、克明に記録されておりました。津波の恐ろしさを後世にも伝承できる映像でした。

この映像を撮影した「みちのく号」ですが、実は原田様はこのヘリコプターの搭乗要員でした。防災業務計画上に記載してある原田様の役割が「防災業務のヘリコプター搭乗員」として登録されていたため、当時の上司の指示で、ヘリコプターの格納庫がある仙台空港へ向かう事になりました。普段は45分程度あれば到着できますが、道路が大渋滞で仙台宮城ICから仙台南部道路を経由して、向かう事になり、その途中で名取川を襲来する津波の第1波と遭遇したそうです。この状況を目の当たりにし、初めて「仙台空港は大丈夫なのか？」と考えたそうです。ヘリコプターは津波襲来前に離陸しており、貴重な映像を撮れる事となりましたが、その連絡は原田様の耳には入っておらず、この事からも当時の混乱ぶりがうかがえます。仙台空港目前で「引き返す」

よう指示があり、Uターンして仙台東部道路を走っていると、高速道路上にも関わらず人々が道路上に避難してきた姿をいくつも確認したそうです。その人々の中に車で走行中に津波に飲まれたものの、流れていた木にしがみつき高速道路のボックスに木ごと引かかっていたところを高速道路上に避難した人々によって助けられた方と遭遇したそうです。ズブ濡れで緊急を要すると判断し、任務外ではありましたが、仙台河川国道事務所まで連れて行き、事務所職員にバトンタッチをし、病院へ搬送しました。助けられた方は後に、お礼と共に「私の人生はラッキーでした」と語ったそうです。

当日の夜に当時の東北地方整備局長が「津波型被災を想定して災害復旧に先立ち、被災自治体の支援と救援ルートの確保が必要」と大臣に具申し、大臣より「国土交通省代表として所掌にとらわれず被災地と被災者が必要とするものは全て行え」との指示を受け、東北地方整備局災害対策本部内に、3月12日にリエゾン（自治体への情報連絡要員）班を、13日には物資調達班を立ち上げ、翌日から活動を開始しました。

原田様は「物資調達班」として被災自治体（避難所）への支援物資の調達と提供の任務にあたりました。被災自治体からの要望をリエゾンがまとめ、「物資調達班」が調達・提供しリエゾンを介して被災自治体へ届けられる仕組みで、当初は、各首長も遠慮されていたのか、要望があまりなかったそうです。しかし整備局長が『私を「ヤミ屋のオヤジ」と思って何でも言って下さい』と手紙を出してからは、状況が一変し、ありとあらゆる要望が寄せられて、「何でも屋」になったと苦笑いされていました。

被災者が集まれば、そこには衣食住が必ず必要とされ、それが整うと、更に要

望が多くなるという事になります。苦勞が絶えなかったと思いますが、その要望に対して平均日数3日で提供したとの話しを拝聴して、各業界への調整能力の凄さとともに、それに応えた各業界の支援の心、そして団結した時の日本人底力に驚かされました。

4月下旬になると、原田様は南三陸町のリエゾンとして派遣され、近畿地方整備局が担っていた業務を引き継ぎました。

リエゾンは被災地自治体の要望を聞く相談窓口になるため、要望の情報収集と対応には特に気をつかったそうです。

例えば避難所や公園など、夜は暗くなるため、照明が欲しいという要望には工事用のバルーンライトを投入するなどに対応し、支援物資の誤配送が多いと苦情が寄せられた際は、市職員が行っていた配送業務を民間宅配業者に対応を変更することで解決に導いたとの事でした。

業務の一方で気がついた事もいくつか紹介頂きました。グラウンドでは仮設トイレや、土中式簡易トイレなどがあり、下水処理が進まない被災地では良い方法であると感じたそうですが、これが大都市部になるとどのように対応していくのかとも感じたそうです。

また、震災後に魚倉庫の倒壊などが原因でハエが大発生したが、そのハエが通常の2～3倍の大きさであり、群生相（高密度で相変異が生じる個体）ではないかという話しをされていましたが、講演会後の宴席でも「確かに大きかった」との声が多数ありました。（興味が湧きました）

このように、震災後、今までにない任務を遂行し、当時被災された方々の要望に見事に応えて、職務を全うされた原田様ですが、現在は（一財）3.11伝承ロード推進機構の業務執行理事として、東日本大震災を風化させず、伝承するべくラ

ジオや機関誌等による情報発信や防災・伝承セミナーやイベント等のブース展示による啓発活動、団体向けの研修会や旅行業者との提携等による防災・伝承ツーリズムなどの事業を通してご活躍されております。

原田様の体験・経験されてきた事が一人でも多くの方々に伝われば、そう遠くない未来に来るであろう大震災への備え、防災意識がさらに高まるもの感じました。

また、被災した際の連携など、今後にも活かせる事が多い、大変貴重な講演会でした。

引き続き行われた賀詞交歓会では、開会に際し、東北地質調査業協会の奥山清春理事長の挨拶に続いて来賓の国土交通省東北地方整備局企画部長の中尾吉宏様より挨拶をいただき、全国斜面防災対策技術協会東北支部の奥山信吾支部長の乾杯で宴席がスタートしました。

久々の再会に互いの近況を確認しあう姿や、地酒の差し入れが宴をさらに盛り上げました。更に講演頂いた原田様も参加された事もあり、大変盛り上った賀詞交歓会となり、新年の門出を祝いました。

締め括りは、全国さく井協会東北支部の鈴木誠之副支部長より、3協会員及びそのご家族の健康と健勝を祈念した手締めを行い、盛会のうちにお開きとなりました。



奥山理事長による挨拶



中尾企画部長による挨拶